

フェイズ理論に基づくアスペクト性と統語構造についての考察*

山田 昌史

要旨

アスペクト性は、Smith (1991) が指摘するように、(i) 動詞や述語が担うもの、(ii) 文使用によって影響を受けるアスペクト性の2つが存在するが、(ii) の観点からの理論研究や (i)(ii) を共通の基盤の下に分析できる理論体系が整備されたことがなかった。本稿は、Chomsky (2000) 以降の Minimalist Program で提案されたフェイズとインターフェイズの考え方を整備しながら、(i)(ii) のアスペクト性が1つの理論的装置から導き出されることを提案した。具体的には、統語構造外の文使用のインターフェイズが VP の構成要素とその文使用の場面を判断して、文が有界の解釈を持つと判断すると、フェイズである vP の主要部に [telic] 素性を付与し、その素性が適切に照合されることで統語構造からアスペクト性が導き出されると提案した。

キーワード：アスペクト性、フェイズ、インターフェイズ、
文使用と統語構造

Introduction

これまでのアスペクト研究は、主に、(A) 動詞の意味的な性質として捉える (cf. Vendler (1967), Levin (1993) etc.) (B) 述語の意味的な性質として捉える (cf. Verkuyl (1993), Dowty (1991) etc.) の2つの観点から主に分類され、また、アスペクト性がどのような構文形成に影響を与えるのか (cf. Goldberg (1995)) について理論的分析が発展した。しかし、Smith (1991) が指摘するように、アスペクト性は、述語 (部) のレベルのみならず、文使用の観点から捉えるべきアスペクト性も存在する。例えば、以下の (1a) では、本来的には有界的な解釈を持つものが、(1b) のような情報が付け加えられることによって非有界の性質を持つことが指摘されている。

言語科学研究第14号（2008年）

- (1) a. Jane painted a picture in an hour.
b. Jane painted a picture for an hour and then just sketched it in.

このような観点を含めたアスペクト性についての理論構築は、これまであまり試みられてこなかった。とりわけ、GB理論を中心とする統語論においては、移動を中心とした文を構成する要素とその関わりを中心に理論の構築が図られたため、意味的效果を持つ統語現象についてはその議論の対象として積極的に取り上げられてこなかった。しかし、Chomsky (1995) の Minimalist Program (以降、MP と略す) の提案によって、統語構造を構築する要素について見直しがなされて以降、量化現象 (cf. Fox (2000), Reinhart (2002))、アスペクト性 (Borer (1994), Borer (1998), 三原 (2004)) などの言語現象が統語構造からどのように導かれるかについて議論が発達した。さらに、Chomsky (2000) では、言語計算の最小単位であるフェイズ (= phase) が提案され、また、Chomsky (2004) において、フェイズを介しての統語構造と認知システムの関係が追究されるに至ると、言語使用を含めた統語理論の構築に新たな可能性が広がった。そこで本稿は、このような近年の動向を踏まえて、Chomsky (2004) のフェイズとインターフェイズの考え方を援用し、これまでの動詞・述語のレベルの、言わば、狭義のアスペクト現象だけではなく、文使用の観点を含めた広義のアスペクト現象を捉えるための理論の追究を図る。

本稿の構成は以下である。1節では、アスペクト性についての先行研究について述べ、それには2つのタイプが存在することをみる (cf. Smith (1991))。そして、本稿が採るアスペクト性についての基本的な立場について述べる。2節において、アスペクト性と統語構造についての先行研究を、3節において、Chomsky (2000, 2001, 2004) のMPで提案されたフェイズやEPP、インターフェイズなどの考え方についてまとめた後で、4節において、本稿の提案を示す。具体的には、統語構造がフェイズを介して、文使用に関わるインターフェイズの判断を求めることによって、アスペクト性を文使用の観点を含めて統語構造から捉えることができる理論を提示する。5節において、本稿をまとめ、また、本稿の抱える問題点について述べる。

フェイズ理論に基づくアスペクト性と統語構造についての考察

1. アスペクト性について

本節では、アスペクト性についてまとめておく。

Vendler (1967) の動詞の4分類の1つの基準としてアスペクト性が採用されたように、アスペクト性は、動詞の持つ性質として規定された。

	例	アスペクト性
states	love, know, believe, have, be sick, ...	非有界
accomplishments	melt, freeze, dry, learn, break, destroy, ...	有界
achievements	pop, explode, collapse, shatter, ...	有界
activities	march, walk, swim, read, eat, ..	非有界

同様に Bach (1986), Smith (1991), Levin (1993) などにおいても、動詞の分類基準の1つとしてアスペクト性が認められ、アスペクト性は動詞の性質と考えられていた。その一方で、以下のように、同じ動詞であっても、アスペクト性が異なる事実が存在することが指摘されている (cf. Dowty (1991), Verkuyl (1993), Levin & Rappaport (1995))。

- (2) a. Edward smoked cigarettes. (非有界)
 b. Edward smoked a cigarette. (有界)
 c. Mary walked in a park. (非有界)
 d. Mary waked to a park. (有界)

(2a – b)、(2c – d) では、同じ動詞 (smoke と walk) が使われているにも関わらず、後続する内項や前置詞句の種類によってアスペクト性が異なっている。

また、以下の例では、本来的には非有界の述語が、着点句や結果述語と共に起することで、有界的な性質へと変化している。

- (3) a. John danced { for an hour / *in an hour }.
 b. John danced to the room { *for an hour / in an hour }.

言語科学研究第14号（2008年）

- (4) a. John hammered the metal { for an hour / *in an hour }.
 b. John hammered the metal flat { *for an hour / in an hour }.

このような事実は、アスペクト性は、動詞の性質ではなく、動詞を含んだ動詞句 (=VP) が担う性質であることを示している。しかし、アスペクト性が動詞の性質・動詞を含む述部の性質のいずれかであるにせよ、どちらも語彙の意味からその性質が生じている。Smith (1991) は、このような述部を構成する要素から決定されるアスペクト性を *situational aspect* と呼んでいる。

その一方で、以下のような述部を構成する要素に留まらず、他の要因によってアスペクト性が判断されるような場合がある。

- (5) a. #Mary walked to school but she didn't get there.
 b. Mary was walking to school but she didn't get there.

(Smith (1991) : 63-64)

(5a) は、(3b) と同様に移動動詞に着点が共起して、有界の特性を示す述語である。この場合、述部の表す事態が完結しているため、その内容を否定できない。(5b) では、(5a) と同じ述語が用いられているが、動詞が進行形となっている。この場合、事態が進行中で未完結であるため、その内容を否定する（到着していない）ことを表すことができる。Smith (1991) は、このような事実を文の持つ完結性 (=perfectivity) を中心としたアスペクト性として、前述の *situational aspect* と区別して *viewpoint aspect* と呼んでいる¹。完結性に基づくこのアスペクト性は、動詞の進行相の働きのみならず、その文が使用される場面の影響を受けるとされる（注1参照）。このような動詞や述部の構成要素以外の影響によって決定されるアスペクト性が存在する。つまり、アスペクト性は、動詞や述部の性質としてのものと文使用によって規定されるものと2つの区分があるのである。

他にも文使用によってアスペクト性が決まる例として、以下のような Hay, Kennedy and Levin (1999) が指摘する段階的達成動詞 (=degree achievement) がある。この動詞は、語彙的には有界・非有界の2つの解釈を持つが、文使用

フェイズ理論に基づくアスペクト性と統語構造についての考察

の場面において記述する動作の達成度の段階が示されると、有界・非有界のどちらかの解釈に限定される。

- (6) a. The soup cooled in an hour.
 b. The soup cooled for an hour. (Hay, Kennedy and Levin (1999) : 1)

同じ非対格動詞 cool が同じ項、the soup と共に文を形成しているが、有界・非有界の別々の性質を示している。(6a) では、スープが完全に冷たくなった状態、(6b) は、完全には冷めていないがある程度の段階までは冷めていることを示している。前者は、スープの結果状態を表す文であるため有界であるが、後者は、結果状態へ向かう中途の段階を表しているため非有界である。語彙的には有界・非有界の2つの解釈がある訳だが、文使用の段階ではどちらかの解釈のみが選択されるはずである。述部の描く変化状態の達成度が有界性に影響を及ぼしているのだが、その達成度についての情報を与えているのは、それぞれの文が使われる場面である。このことから、有界性の判断は、文使用の場面を考慮しないと捉えられないと考えられる。

また、以下の例でも同様のことが観察される。

- (7) a. Jane painted a picture for an hour and then just sketched it in.
 b. Jane painted a picture in an hour.
 (8) a. Jane rolled the barrel to the store for five minutes and then kicked it the rest of the way.
 b. Jane rolled the barrel to the store.

(Ertischik-Shir and Rapoport (2004) : 228)

(7b) (8b) のように、paint a picture, roll the barrel to the store は、本来的には有界的な性質を持つ。しかし、(7a) (8a) のように、付加的な情報が与えられる、つまり、文使用についての状況が与えられると、非有界の性質を持つ。これらの例もアスペクト性と文使用の関わりを明確に示す例であると言える。

言語科学研究第14号（2008年）

また、Higginbotham (1999) が指摘する以下の例は、(i) ボートがユラユラと揺れて流れて行き、最終的に橋の下にたどり着く、(ii) ボートがユラユラと揺れている場所が橋の下である、の2つの解釈が存在する。

(9) The boat is floating under the bridge. (Higginbotham (1999) : 132)

(6) の例と同じように、(9) は、文使用の場面では上記の (i)(ii) のいずれかの解釈のみを持つことから、(9) が到着の意味を持つか否か、つまり、有界か非有界かは文使用の場面で決定されるのである。

ここまでの議論から、Smith (1991) が分析するように、アスペクト性は、(i) 動詞または動詞を中心とした述部が担う (situational aspect)、(ii) 文使用の場面において決定される (viewpoint aspect)、の2つのタイプがあることが分かる。この2つのアスペクト性がどのように関連し合うか、また、それらの関係をどのように理論化するのかについて考察するのが本稿の目的である。そこで、本稿では、アスペクト性は、(i) の語彙的性質が中心的な担い手でありながら、(ii) の文使用を含めて判断すべきものであるとの立場をとってアスペクト性を考えたい。まとめると、アスペクト性に関する本稿の考え方は以下である。

(10) アスペクト性は、動詞またはそれと共に起して述部を形成する要素によって合成的に基本的なアスペクト性を担う。そして、文が実際に使用される場面、つまり、語用論的な評価を受けて最終的なアスペクト性が判断される。

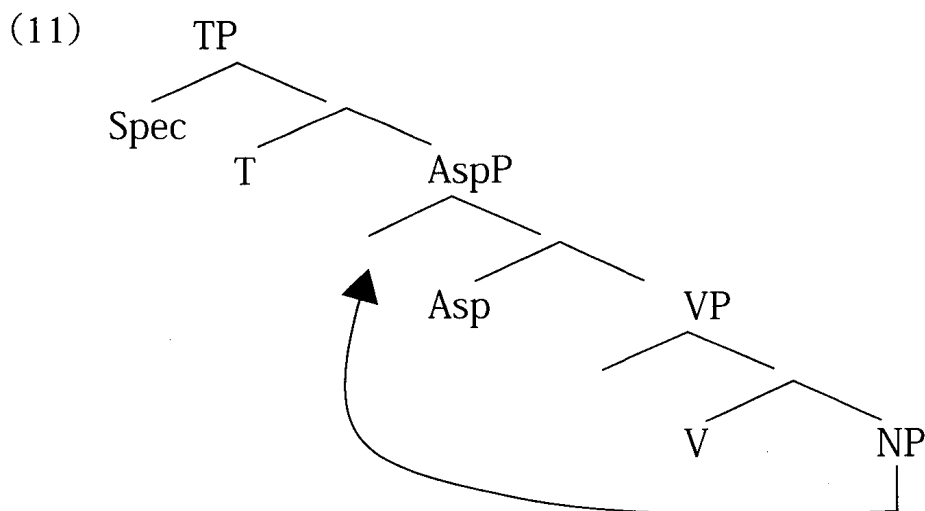
これまでのアスペクト性に関する分析は、動詞・述部といった語彙的な性質として理論的枠組みが示されてきた (cf. Jackendoff (1990), 影山 (1996), Borer (1994), 三原 (2004) など)。しかし、文の使用場面で決定されるアスペクト性については、これまで積極的な理論提示がなされてこなかった。さらに、2つのアスペクト性を同一の理論体系の下で説明する試みはほとんどない。そこで本稿では、以下の節で Chomsky (2000, 2001, 2004) を中心とした MP の枠組みの中で文使用とアスペクト性についての理論を構築し、(10) の

フェイズ理論に基づくアスペクト性と統語構造についての考察

2つのアスペクト性が統語構造から捉えられることを示す。

2. アスペクト性と統語構造

本節では、動詞や述語のアスペクト性を統語構造から導き出す分析について概観しておく。Borer (1994) では、以下のように、VP の上位に機能範疇である Aspect Phrase (=AspP) を導入することで、述語の有界性を統語的に捉えることが可能であると提案している。



(11) において、動詞の内項が AspP の指定部に移動し、その指定部に指定されている有界的な特徴を記述した素性と一致関係を構築することで、述語に有界の解釈があることが保証されると分析する。このようなアスペクト性、特に、述語の有界的な特徴を統語構造から捉える試みは、統語構造に導入する範疇や素性の違いはあるものの、Ritter & Rosen (1998, 2000)、van Hout (1998)、Svenious (2001)、三原 (2004) などにも見られる。

これまでの意味的特徴を統語構造に反映することに積極的ではなかった統語理論 (Chomsky (1981, 1986) など) とは異なり、アスペクト性という意味的な特徴を統語的に捉え、また、その性質に影響を受ける統語現象 (中間構文や結果構文) に対して、項構造や移動などの観点からではなく、意味の観点を中心に理論を構築したことは統語理論にとって意義深いものであった。本稿でも基本的には、これらの分析を踏襲して統語構造においてアスペクト性を捉え

言語科学研究第14号（2008年）

るべきものとする。しかし、既に指摘したように、アスペクト性は、語彙的な特徴に留まらず、文使用のレベルで決定されるものがある（(5)-(9)）。本稿では、後の節で、このような事実を含め、統一的にアスペクト性を捉える理論の構築を図る。

3. 統語構造とインターフェイス：Chomsky (2000, 2001, 2004)

本節では、具体的な提案を示す前に、本稿が採用する理論的枠組みについてまとめしておく。

3.1. フェイズと EPP

MP の出発点となった Chomsky (1995) では、(i) 文の構築に当たって語彙項目 (=Lexicon) から、それに必要な要素を取り出して数え上げ (=Numeration) によってあらかじめ文に必要な要素を全て書き出してリスト (=Lexical Array (LA)) 化し、(ii) 文の全ての要素が統語構造内で適切に認可されてから PF・LF のインターフェイスに送付する文構築のモデルが示された。しかし、このような考え方では、(i) のリストに記載される語彙の数が膨大になる可能性があること、また、(ii) によって一度に相当量の情報が PF・LF に送られることになり、言語計算が複雑になるなど問題が生じる。そこで、Chomsky (2000) は、高い計算的合理性を追求して、文構築の際に基本となる単位としてフェイズを導入する。フェイズは、命題（または文）に相当する言語単位で、CP と vP の2つがその形成単位と仮定される。これらの単位を基本として派生を進めることで、(i) フェイズ単位ごとに数え上げを設定することで、数え上げに含まれる要素の数を最小化できること、(ii) フェイズ単位で（そのフェイズにそれ以上先の派生に関与する要素がなければ）PF・LF に送る (=spell-out) ことで、計算単位を小さくして効率的な言語計算が行える言語理論へと転換した。

また、Chomsky (2001) では、このような移動の駆動要素に加えて、意味的な効果を生じる駆動要素についての提案がなされた。

意味的な効果を生じる統語的移動に関しては、既に Fox (2000) などで指摘されているが、Chomsky は、Holmberg & Plazack (1995) などが指摘するアイスランド語の目的語置換 (object shift) を意味解釈のために移動が必要である例として挙げている。アイスランド語（やその他のスカンジナビア語系の

フェイズ理論に基づくアスペクト性と統語構造についての考察

言語) では、以下のように目的語の上昇が動詞移動に伴って生じる。

(12) a. Jon pekki hana ekki.

John knows her not.

b. *Jon hefur hanna (ekki) seð.

John has her/it not seen (Holmberg & Platzack (1995): 141)

(12a) では、not を越えて動詞と目的語が移動しているが、(12b) のように動詞の移動が起こらなければ、目的語置換は起こることがない。しかし、動詞の上昇が起こっても目的語の置換が起こらない例が存在する。

(13) a. Jon keypti ekki bokina / bok

John bought not the-book / a book

b. Jon keypti bokina / *bok ekki.

(Holmberg & Platzack (1995) : 144)

(13a) は、動詞が上昇しているが目的語は移動を起こしていない例であるが、この場合、目的語が定・不定に関わらず文法的である。(13a) から (12a) のような目的語置換を生じた (13b) の文では、定の名詞句 (the book) の場合、文法的な文を生成するが、不定の名詞句 (a book) の場合、非文法となる。このことは、目的語置換は、目的語の定性にその生成可能性が委ねられることを意味する。つまり、意味解釈が目的語を VP の外への移動を駆動するのである。

Chomsky (2001) は、このような事実を捉えるために、以下のような意味的な移動に関わる理論を提出している。

(14) Optional operations can apply only if they have an effect on outcome :
in the present case, v^* may be assigned an EPP-feature to permit
successive-cyclic A-bar movement or Int (under OS).

言語科学研究第14号（2008年）

- (15) a. v^* is assigned an EPP-feature only if that has an effect on outcome.
 b. The EPP position of v^* is assigned Int.
 c. At the phonological border of $v^* P$, XP is assigned Int'.

(Chomsky (2001) : 34-35)

つまり、意味的な要因によって解釈上の変更が必要である場合、移動が駆動できるように、(必要に応じて) vP の主要部に EPP を付与して、XP の移動を促すことが可能であるとしている。上記の例では、アイスランド語の目的語置換は、定性という意味的な要請により vP の主要部に EPP が付与され、その素性照合のために移動が駆動される。このような提案から、これまでの統語的効果を生み出す移動に加えて、意味をその動機とする新たな移動の理論が確立された。

まとめると、(i) これまでの移動自体は規制せず、派生の結果に対して規則を適応する移動の理論から移動自体の発動に強い動機付けを求めて移動自体の発生を規制する理論へと転換し、(ii) 文構築に当たって経済性の追究から計算上の単位であり、また、命題 (= proposition) をその基本的単位とするフェイズの概念が提案され、(iii) これまでの統語的効果が期待される移動のみが分析の対象とされた文法体系から意味的な効果を基盤とする統語的操作についてもその分析の範囲が及ぶ文法体系へと変化したのである。

3.2. フェイズとインターフェイスの働き

上記の (ii) と (iii) の観点から移動の体系をさらに発展させた Chomsky (2004) においてさらなる精密性を追究する分析が提案された。

3.1 節でまとめたように Chomsky (2001) は、統語構造に意味的效果を反映するための EPP を提案した。しかし、EPP がどのようなメカニズムによって統語構造に導入されるのか明確な定義がなされておらず、アプリアリな仮定と言わざるを得ない。そこで、Chomsky (2004) は、以下のような統語構造上の意味的效果がインターフェイスによってもたらされると規定した。

- (16) The C-I system requires that SEM express a variety of semantic properties. These include at least argument structure; call such properties "theta-theoretic," without commitment to one or another

フェイズ理論に基づくアスペクト性と統語構造についての考察

version of interpretability at the C-I interface. But beyond theta theoretic C-I makes use of other kinds of semantic interface information, including scopal and discourse-related properties (new/old information, specificity, etc.). (Chomsky (2004) : 110)

(16) では、統語構造を構成する内的な要素によって EPP の存在が動機づけられるのではなくて、統語構造外の認知的機能がこの素性の存在を動機づけるとされる。そして、その統語構造外のインターフェイス（意味解釈に関わる C-I インターフェイス）との関わりで駆動される EPP を OCC (=Occurrence feature) と呼び、この素性を以下のように規定している。

(17) [A] n EPP-feature in standard terminology, or from another point of view, the feature OCC that means "I must be an occurrence of some β ." Optionally, OCC should be available only when necessary, that is, when it contributes to an outcome at SEM that is not otherwise expressible . (Chomsky (2004) : 112)

即ち、意味的な要請によって、つまり、その意味成分が統語的な現れが必要であるとインターフェイスが判断すると、OCC によって統語的位置が与えられるようになる。このような統語構造外のインターフェイスと統語構造の接点となりうる統語範疇は、フェイズである CP と v P である。この2つの範疇を通じて、文構築に必須となる意味的要素に影響を与えられた統語操作がかかる場合には、統語構造外のインターフェイスの要請で統語的な効果が生み出されるように素性をフェイズの主要部に付与する。つまり、OCC は、意味的效果を統語構造内に導入するために必須であり、また、その素性の力によりこれまで分析の対象から外されてきた移動の生起が予測できるようになったのである。

Chomsky (2004) の議論から、統語構造とその外のインターフェイスを結びつけているのは、フェイズとなる。つまり、フェイズの概念を追究することでこれまでの文構築要素のみにその分析対象を限っていた理論体系を脱して、より広範囲な言語現象を扱うことが可能となる体系へと発展する可能性を秘め

言語科学研究第14号（2008年）

ているのである。この提案を受けて、談話・語用といった文使用によって言語的な現れが決まる話題化 (=topicalization)、焦点化 (=focus) などの言語事実から文と密接に関わる語用的要因がどのように統語構造に反映されて統語効果を生み出すのかについての分析が提出されてきた。特に、長谷川 (2006) は、フェイズを構成する主要な要素である命題は、語用的機能の影響によってその構築がなされると考えられる言語現象が日本語に顕著にみられることを指摘し、(特に日本語の統語構造において) 発話・語用的機能から文構造の再検討の必要性を主張している。長谷川が指摘するように、フェイズがどのように文構築に関与するかについては明確な理論的基盤の整備が必要であることは間違いないが、フェイズを文構築と語用的要素を受け入れる窓口であると仮定することで、文と述部の2つの言語的な単位が外部のインターフェイスと文構造においてフェイズを介して密接に関わることが可能となる。このような観点から統語構造を再構築することによって、これまでの命題を中心とする統語理論から語用的側面を含めた総合的な統語理論が構築されることが考えられる。

本稿が議論しているアスペクト性も、1節で指摘したように文使用の側面がそれに関与することから、フェイズとインターフェイスの関係について理論を整備することで、2節で概観した先行研究とは異なる観点から新たな理論の構築ができると考えられる。

本稿は、述語構成に関与するフェイズ、 vP を中心として、統語構造とその外のインターフェイスの関係についての理論を整備して、(10) のアスペクト性が統一的に統語構造から説明できる理論の構築を図る。

4. 提案

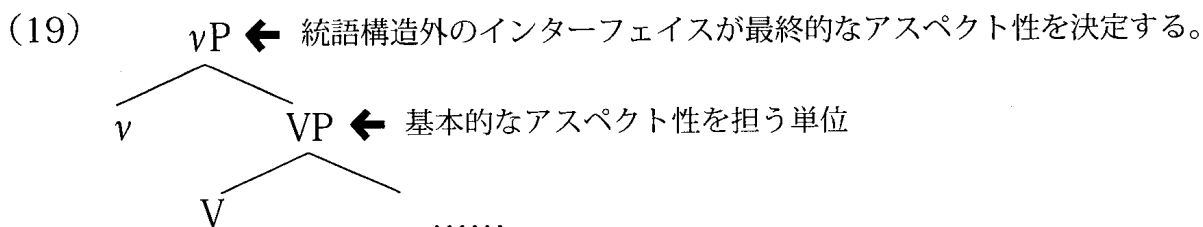
3節までに (i) アスペクト性は、2つの相 (動詞・述部の本質的な性質と文使用によって決定されるもの) があるとする Smith (1991) を基盤として (10) のようなアスペクト性についての立場を採ること、(ii) Chomsky (2000, 2001, 2004) が提案するフェイズとインターフェイスに関する理論を概観し、これまで統語構造において分析されることのなかった文使用と統語構造の理論が確立されたことを見た。本節では、(10) (以下、(18) として採録) を捉えるために、フェイズとインターフェイスの理論を構築して、アスペクト性を統

フェイズ理論に基づくアスペクト性と統語構造についての考察

語構造から導き出す理論を確立する。

- (18) アスペクト性は、動詞またはそれと共起して述部を形成する要素によって合成的に基本的なアスペクト性を担う。そして、文が実際に使用される場面、つまり、語用論的な評価を受けて最終的なアスペクト性が判断される。

本稿では、(18) を捉えるために、(19) の統語構造を仮定する。



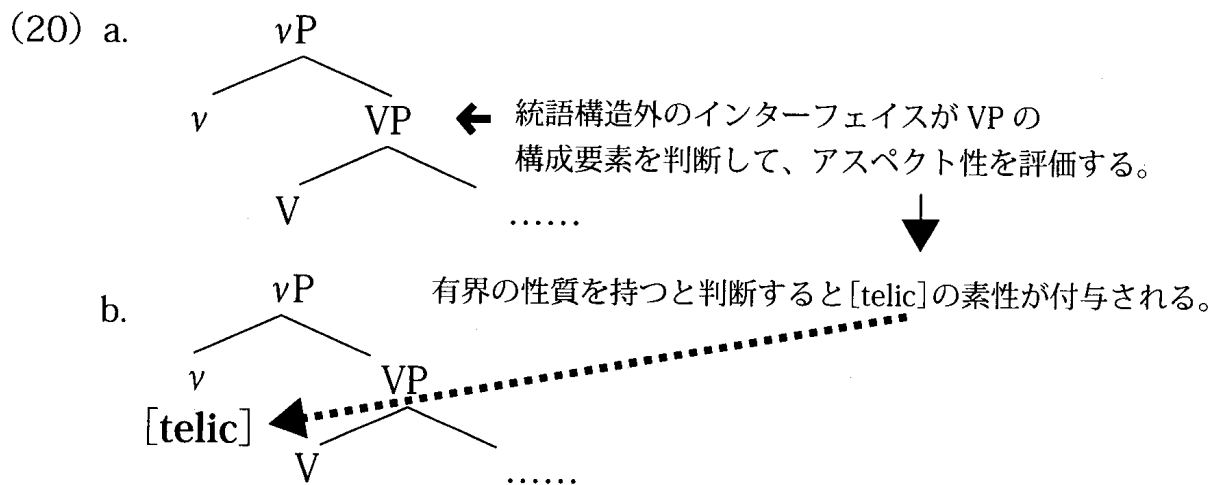
(19) で、VP のレベルが動詞やそれと述部を構成する要素が持つ基本的なアスペクト性を担う。これが、先行研究で捉えられてきた語彙的な特性をもとにするアスペクト性である。そして、C-I インターフェイスと統語構造の接点となって、文使用の状況から意味的要素を統語構造に導入するのがフェイズ (CP または vP) であるとの前節で概観した Chomsky (2004) の提案から、アスペクト性という意味的側面もフェイズを介して、統語構造外のインターフェイスによってその性質が決定されるとする。アスペクト性は、VP が基本的に担うものであるが、それだけでは完全に決まらず、VP 上位のフェイズである vP において、統語構造外の文使用に関わるインターフェイスが VP の性質を判断することで、述部の持つアスペクト性を最終的に決定する。そして、その特性を vP の主要部に付与する。このことから、文使用を含めた全てのアスペクト性を担うのは、フェイズである vP の主要部であると分析する。

本稿では、アスペクト性は、インターフェイスが統語構造に素性の形で導入するとする。その素性は、Chomsky (2004) が提案する (17) の OCC の一種であり、インターフェイスが意味的な効果を統語構造において必要であると判断する場合に限って、vP の主要部にこの素性を付与するとする。そして、こ

言語科学研究第14号（2008年）

の素性を [telic] と名付けることとする。本稿の提案する [telic] は、基本的には、2節で取り上げた先行研究が主張する AspP などのアスペクト性を統語構造に導入するために仮定された範疇の主要部に指定された素性と同じ性質のものである。しかし、それとここで提案する [telic] 素性が決定的に異なるのは、前者が統語構造にあらかじめ導入される素性である一方で、後者は、Chomsky (2004) が主張する OCC の1つの具現形、つまり、意味的な EPP の一種である点で、インターフェイスによって必要であると判断されるまで統語構造に導入されることのない素性である点である。この性格づけから、本稿が提案する [telic] 素性は、先行研究による単なるアスペクト性の反映のためだけに統語構造に仮定した素性ではなく、人間言語に真に必要な素性（つまり、EPP）の1つの具現形として位置づけられるのである。

本稿が提案をまとめると以下のようなになる。



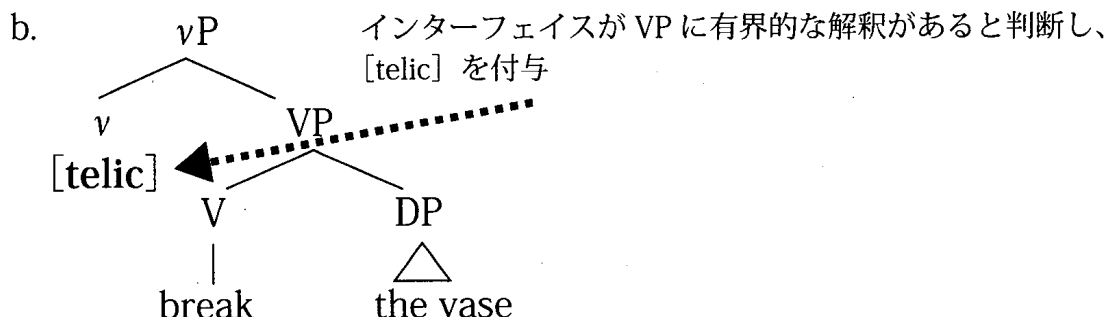
このような提案から、(18) のアスペクト性が統語構造から統一的な理論体系の下で導き出されるのである。

具体的な例から、本稿の提案がどのようにアスペクト性を統語構造から導き出すのか検証する。

まず、語や述語が本来的に有界の性質を持つ事実から見る。

フェイズ理論に基づくアスペクト性と統語構造についての考察

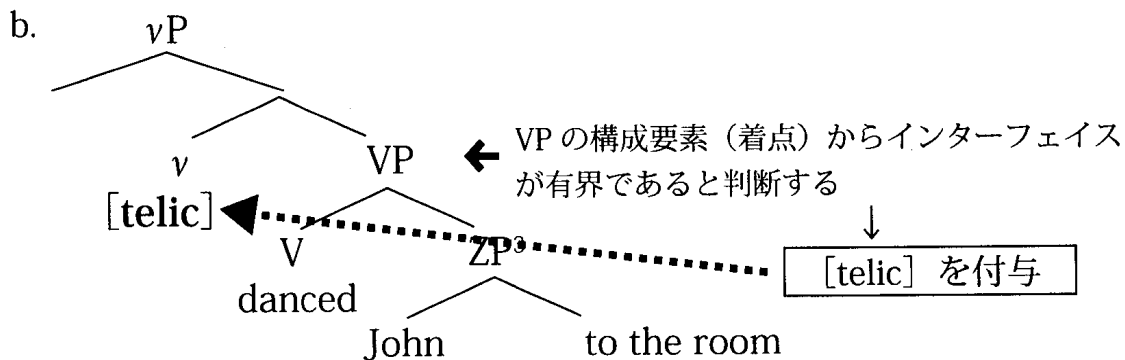
(21) a. John broke the vase.



(21) では、break が本質的に有界的な性質を持つ。この性質から即座に vP の主要部に [telic] が付与されるのが従来の分析 (cf. Borer (1994)) であったが、本稿では、vP の主要部への [telic] 素性の導入は、インターフェイスが VP の使用される語用的な環境を判断して、有界の性質を生み出すと判断した後に導入される。(21b) では、break が語彙特性としてもつ有界的な特性が述部全体に引き継がれるとインターフェイスが判断して、vP の主要部に [telic] の素性を付与されている。この素性は統語構造に導入された段階で、照合されなくてはならない。本稿では、英語では、有界の出来事の結果として生み出される結果状態の担い手である内項要素²が [telic] 素性と一致 (=Agree) して、素性照合を果たすと分析する。このことで、統語構造から (21a) に有界の解釈があることが導き出される。

次に、以下のように本来的には非有界である動詞が着点句との共起することによって、述語全体が有界な特性を帯びる例について検討する。

(22) a. John danced to the room. (= (3b))

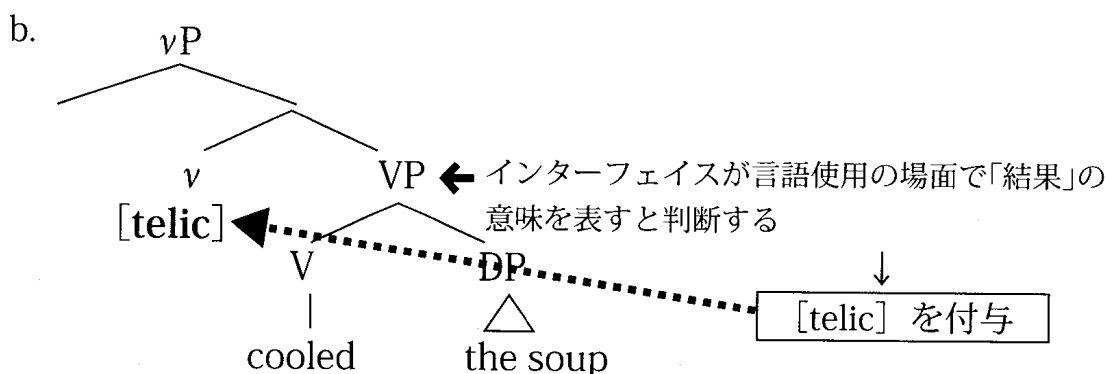


言語科学研究第14号（2008年）

VP の構成要素である to the room が着点として働き、文がその位置に移動主体が到達するという解釈が生じるとインターフェイスが判断すると、vP の主要部に [telic] を付与する。この分析から主動詞 dance は、有界的な性質を持たない動詞であるが、VP 全体が有界であると統語構造外の文使用と関わるインターフェイスが判断すれば、[telic] 素性が導入されて、文が有界となることが予測できるのである。[telic] 素性は、移動によって着点に到着する要素である動作主体であるが、位置変化主体でもある John が [telic] 素性を照合する⁴。

最後に、1 節で文使用の環境がアスペクト性の選択に関わる例について分析する。(6) ((23a) として採録) は、(23b) のような統語構造を持つ。

(23) a. The soup cooled. (= (6))



(23a) の段階的到達動詞は、有界性が曖昧だが、文使用によって cool の段階が最終段階に達したことを表す、つまり、有界的な意味を持つ場合、(23b) のように文使用に関わる統語構造外のインターフェイスが vP の主要部に [telic] が付与する。この素性を変化主体である the soup が照合して、有界の特徴を持つこととなる。(23) と異なる解釈である非有界の性質を持つ場合、(23a) と同様の文がインターフェイスに文使用の観点から判断をされて、結果を含意せず非有界の解釈を持つとされると、[telic] 素性は、vP の主要部に導入されることはない。そのため、統語構造上において有界の解釈を持たず、非有界の特性を持つこととなる。

本節では、Chomsky (2004) の意味的な概念を統語構造に反映する OCC と統語構成要素外の語用的な効果を統語構造に導入可能とするフェイズの概念を

フェイズ理論に基づくアスペクト性と統語構造についての考察

援用することで、(i) アスペクト性は [telic] 素性として統語構造に導入されるものであり、(ii) それは、アスペクト性に影響を与える統語構造外の文使用に関わるインターフェイスが必要と判断した時にのみ、統語構造に導入され、(iii) その素性が適切に照合されることで統語構造において有界性が導き出されることを提案した。この提案により、(18) の本稿がとるアスペクト性についての2つの特徴が1つの統語的な操作によって予測することが可能となった。つまり、本稿の提案は、Borer (1994) などの統語構造からアスペクト性を導き出す分析を採用しながらも、これまで扱えなかった事実について Chomsky (2004) のフェイズとインターフェイスの理論を整備することで捉えることができるのである。

次節において、本稿をまとめ、また、本稿の抱える問題点について述べる。

5. まとめと問題点

本節では、本稿の提案をまとめると共に、本稿の抱える問題点について述べる。

本稿では、アスペクト性は、VP の構成要素によって複合的に構成される性質を基盤としながらも、語用的な観点が必要であることを指摘して (cf. Smith (1991))、両者を統一的に捉える理論を探ってきた。Chomsky (2000, 2001, 2004) のフェイズとインターフェイスの概念をアスペクト性を導き出す理論に導入して、これらの概念を中心に統語構造を構築した。具体的には、VP のアスペクト性の判断を統語構造外の文使用とかかわり合うインターフェイスに委ねて、それが VP が有界的だと判断すると、統語構造とインターフェイスをつなぐフェイズである *v*P の主要部に有界性を統語構造に導入する素性である [telic] を導入し、それを統語構造内で照合することで統語構造からアスペクト性が導き出せる理論を構築した。本稿の提案において、アスペクト性と統語構造の関係を探る先行研究 (Borer (1994, 1998), Ritter & Rosen (1998, 2000), 三原 (2004) など) を踏襲しながらも、広義のアスペクト性 (viewpoint aspect) の事実もその分析の対象に含め、様々なアスペクト現象を統一的に説明する理論の提示がなされた。

最後に、本稿の抱える問題 (今後の課題) についてまとめておく。

本稿の提案は、これまであまり扱われてこなかった語用的要素の影響を受け

言語科学研究第14号（2008年）

るアスペクト現象をも含めて統語構造から予測できる理論構築を図った点により広いアスペクト現象を受け入れる可能性を持つ。また、意味的な効果をもたらす EPP (=OCC) の導入とフェイズの概念の2つを中心的な理論的基盤に据えたことで最小限の道具立てにより、アスペクトと統語理論の関係を理論化できたと考えられる。しかし、その一方で、予期しない文法文を派生する可能性を持つ。また、本稿が拠り所にする「統語構造外の文使用に関わるインターフェイス」について、統語構造と密接にかかわり合う語用的要素という観点から位置づけたものの、それが人間の言語のメカニズムにとってどのような役割を果たし、また、どのような性格を持つものなのか、議論を進めて、文構築における統語構造を作り上げる要素とそれに影響を与えて文の意味を構成する要素の関係について具体的な言語全体のシステムを示すことが重要であると考えられる。

また、統語構造外の文使用に関わるインターフェイスが VP のアスペクト性を判断する訳だが、その判断には文全体が実際に使用される発話場面を想定することとなり、先読みの性質を持つこととなる⁵。統語構造構築と文使用の関係を考える上で議論が必要な問題であり、今後の大きな課題となる。

このような問題点を乗り越え、アスペクト性と統語構造の関係について理論を精密化して行くことが必要である。

参考文献

- Bach, Emmon. (1986) The Algebra of events. *Linguistics and Philosophy* 9: 5-16.
- Borer, Hagit. (1994) The Projection of arguments. *University of Massachusetts Occasional Papers in Linguistics* 17, 19-47. Amherst, Mass. : GLSA.
- Borer, Hagit. (1998) Deriving passive without theta roles. In S. G. Lapointe, D. K. Brentari & P. M. Farrell (eds.), *Morphology and its relation to phonology and syntax*, 60-99. Stanford, Cal. : CSLI Publications.
- Chomsky, Noam. (1981) *Lectures on government and binding - Pisa lectures*. Dordrecht : Foris.
- Chomsky, Noam. (1986) *Knowledge of language*. New York, NY. : Praeger.
- Chomsky, Noam. (1995) *The Minimalist program*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Chomsky, Noam. (2000) Minimalist Inquiries : the Framework. In R. Martin, D. Michaels and J. Uriagereka (eds.), *Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, 89-156. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Chomsky, Noam. (2001) Derivation by phase. In M. Kenstowicz (ed.) *Ken Hale : a life in language*, 1-52. Cambridge, Mass. : MIT Press.

フェイズ理論に基づくアスペクト性と統語構造についての考察

- Chomsky, Noam. (2004) Beyond Explanatory Adequacy. In A. Belletti, *Structures and beyond : the Cartography of syntactic structures, volume 3*, 104-131. New York : Oxford University Press.
- Dowty, R. David. (1991) Thematic proto-roles and argument selection. *Language* 67, 547-619.
- Ertischik-Shir, Nomi and Tova Rapoport. (2004) Bare aspect : A Theory of syntactic projection. In J. Gueron & J. Lecarme (eds.,) *The Syntax of time*. 217-234. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Fox, Daniel. (2000) *Economy and semantic interpretation*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Goldberg, E. Adele. (1995) *Constructions : A Construction grammar approach to argument structure*. Chicago, Ill. : University of Chicago Press.
- Hasegawa, Nobuko (2001) Causatives and the role of v : Agent, causer, and experiencer. In K. Inoue & N. Hasegawa (eds.), *Linguistics and interdisciplinary research : Proceedings of the COE international symposium*. 1-35. Kanda University of International Studies.
- Hasegawa, Nobuko. (2004) 'Unaccusative transitives' and Burzio's generalization : Reflexive constructions in Japanese. In. A. Csirmaz, Y. Lee, and M. A. Walter (eds.), *Proceedings of WAFL 1 (MIT working papers in linguistics 46)*, 300-314. Cambridge, Mass. : MIT.
- 長谷川信子 (2006) 「日本語の主文現象と統語理論：今、主文現象が面白い」 *Scientific Approaches to Language* 5, 1-8. 神田外語大学言語科学研究センター
- Hay, Jennifer, Christopher Kennedy and Beth Levin. (1999) Scalar structure underlies telicity in "degree achievements" *The proceeding of SALT 9*.
<http://home.uchicago.edu/~ck0/docs/hkl-salt9d.pdf>
- Higginbotham, James. (1999) Accomplishments. *Proceedings of the Nanzan GLOW*, 131-140.
- Hoekstra, Teun. (1988) Small clause results. *Lingua* 74, 101-139.
- Holmberg, Anders and Christer Platzack. (1995) *The Role of inflection in Scandinavian syntax*. New York, NY. : Oxford University Press.
- van Hout, Angeliek. (1998) *Event Semantics of verb frame alternations*. New York, NY. : Gerland Publishing Inc.
- Jackendoff, Ray. (1990) *Semantic structures*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 くろしお出版
- Kayne, Richard. (1984) *Connectedness and binary branching*. Dordrecht : Foris
- Levin, Beth. (1993) *English verb classes and alternations : A Preliminary investigation*. Chicago, Ill. : Chicago University Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport. (1995) *Unaccusativity : At the Syntax-lexical semantic interface*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- 三原健一 (2004) 『アスペクト解釈と統語構造』 松柏社
- Reinhart, Tanya. (2002) The Theta System : An Overview. *Theoretical Linguistics* 28, 229-290.
- Ritter, Elizabeth and Sara T. Rosen. (1998) Delimiting events in syntax. In M. Butt and W. Geuder (eds.), *The Projection of arguments : Lexical and compositional factors*, 135-164.

言語科学研究第14号（2008年）

- Stanford, Cal. : CSLI.
- Ritter, Elizabeth. & Sara. T. Rosen. (2000) Event structure and ergativity. In C. Tenny and J. Pustejovsky (eds.), *Events as grammatical objects : The Converging perspectives of lexical semantics and syntax*, 187-238. Stanford, Cal. : CSLI Publications.
- Smith, (1991) *The Parameter of aspect*. Dordrecht : Kluwer.
- Svenius, Peter. (2001) Case and event structure. ZASPIL 26. Centre for General Linguistics, Typology and Universals Research (ZAS), Berlin.
[http : //www.hum.uit.no/a/svenonius/papers/svenonius01CES.pdf](http://www.hum.uit.no/a/svenonius/papers/svenonius01CES.pdf)
- Tenny, Carol. (1994) *Aspectual roles and the syntax-semantic interface*. Dordrecht : Kluwer Academic Press.
- Vendler, Zenon. (1967) *Linguistics and philosophy*. Ithaca, NY. : Cornell University Press.
- Verkuyl, J. Henk. (1993) *A Theory of aspectuality : The Interaction between temporal and atemporal structure*. New York. : Cambridge University Press.
- 山田昌史 (2006) 『アスペクト転換と統語構造：結果性を統語構造から予測する』博士論文
神田外語大学

注

- * 本稿は、神田外語大学に提出した博士論文『アスペクト転換と統語構造：結果性を統語構造から予測する』の4章および5章に加筆・訂正したものである。博士論文の指導にあたって下さった長谷川信子先生、斎藤武生先生、木川行央先生、井上和子先生に感謝申し上げる。本稿の一部は、2007年1月に行われた神田外語大学言語科学研究センターにおける研究発表の内容を一部含む。研究発表の際に、藤巻一真氏、上田由紀子氏、内堀朝子氏、高橋将一氏から有益なコメントを頂いた。附して感謝申し上げる。また、本研究は、平成19年度島根県立大学学術教育研究特別助成金（研究テーマ「結果性」の表示における普遍性と個別性）の助成を受けて行った研究成果である。
- ¹ 以下、(6)-(9)で述べる例は、完結性の観点をその分類基準とするSmith (1991)のviewpoint aspectの概念と完全に一致しない可能性があることを指摘しておく。Smith (1991)は、viewpoint aspectについて 'What information a viewpoint presents is affected, and limited, by the structure of the situation talked about. (Smith (1991): 62)' と述べている。本稿は、語や述部のアスペクト性と本質的に異なる文の発話の段階で決定されるアスペクト性を指してviewpoint aspectとする。
- ² 紙幅の都合で詳細を述べられないが、本稿では、(2)-(4)の事実や以下の(i)-(ii)の事実から、英語においては、動詞が描く事態の被対象者であり変化を担う要素が[telic]を照合すると分析する。
- (i) a. ride the house to death.
b. *ride on the house to death.
- (ii) a. paint the wall blue.
b. *paint on the wall blue. (Tenny (1994) : 48)

フェイズ理論に基づくアスペクト性と統語構造についての考察

なお、山田（2006）では、[telic] を照合する要素の違いが「結果」を表す構文における言語的な違いを生み出すことを提案している。

- ³ 本稿では、紙幅の都合で、着点や結果述語と移動や変化の主体が統語構造内のどの位置を占めるかについての明確な分析を行えないため、その範疇を ZP として記す。この範疇の中に変化主体と変化の様態が叙述関係を結び、さらに ZP がそれと姉妹関係にある V と VP を構成し、VP がインターフェイスの判断を受ける対象であるとしておく（cf. Kayne (1984), Hoekstra (1988) など）。本稿で重要なのは、あくまでも VP の単位であって、V や ZP の性質ではなくて、VP の性質をインターフェイスがどのように判断するかによってアスペクト性が決まる点である。
- ⁴ 移動動詞とその項の意味役割についての議論は、Hasegawa (2001, 2004), Reinhart (2002) を参照。
- ⁵ この問題点については、2007年1月に行われた神田外語大学言語科学研究センターにおける研究発表において、内堀朝子氏にご指摘頂いた。